

《原著》

2年制栄養士専門学校における「高校新卒」と「それ以外」の社会人基礎力 —N専門学校の事例—

加藤直子¹⁾ 安達内美子¹⁾

要旨

【目的】2年制栄養士専門学校の特徴は、年齢や経歴が多様な学生が在籍しているケースが多いことである。本研究では、「高校新卒」と「それ以外」の社会人基礎力の違いを明らかにすることを目的とした。

【方法】2017年2月、N専門学校1年生（14名）を対象にフォーカスグループインタビューを実施し、その結果と社会人基礎力（12項目）を基に質問紙を作成した。2017年4月、N専門学校1年生65名に質問紙調査を実施した。「高校新卒」と「それ以外」に分け、社会人基礎力の比較を行った。

【結果】65名中「高校新卒」群は46名、「それ以外」群は19名だった。社会人基礎力について、自分が“現在必要な力”は、「高校新卒」群と「それ以外」群に有意差は見られなかった。“現在できる力”は、主体性、計画力、創造力について、「それ以外」群は「高校新卒」群と比べて有意に点数が高かった。傾聴力については、「高校新卒」群は「それ以外」群と比べて有意に点数が高かった。

【結論】教育者はこれらを認識し、学びの場を作ることが、多様な学生の自己実現の可能性を高めることにつながると考えられた。

キーワード：2年制栄養士専門学校、社会人基礎力、学習目標

1. 序論

2年制栄養士専門学校は、栄養士資格を最短2年で取得することができ¹⁾、高校新卒以外の学生も多く、進学や資格取得を求める学生や社会人が再入学しやすく、既婚者や新たなチャレンジを求める高年齢者の学びの窓口となっており、総じて入学の間口が広いことが特色である²⁾。また、多くの養成施設が「実社会に即戦力となる栄養士」を目指す³⁻⁵⁾通り、短期間に集中して専門分野を学び、実習を経験して卒業することができる。よって2年制栄養士専門学校には様々な背景の学生が在籍しているケースが多い。

愛知県名古屋市にある2年制栄養士専門学校

（以下、N専門学校）には、高校新卒者の他に大学・短大卒業者や中退者、飲食店や給食施設の調理従事経験者や介護施設等従事経験者、シングルマザー等、多様な経歴をもつ学生が在籍している。また近年、外国籍の学生の姿も見られるようになった。加えて入学の目的も、栄養士免許取得だけではなく、将来の就職の手がかりを求める、入学前のキャリアをスキルアップさせる、専門分野を学びたいという強い学習意欲を満たす、管理栄養士を目指す、など多様であり学生ひとりひとりの「学習目標」も多様であると考えられる。一方、入学者の7割を占める高校新卒者は、具体的な目的を持っている者と、将来の進路や目標が1つに絞れず、漠然とした目的しか語れない者もいる。

1) 名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科

このように2年制栄養士専門学校では、背景、年齢、目的や目標も多様な学生が共に、教室で机を並べ授業を受け、それぞれが将来を模索しながら自己実現のために、資格取得や目的達成を目指し学校生活を送っていることが考えられる。また、それぞれの学生が社会に出るまでに身につけておきたい基礎的な力についても、多様であることが考えられる。そこで、社会人基礎力を用い、学生が思っている現在自分ができるとする力や必要な力を比較し、違いを検討することとした。

「社会人基礎力」とは、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力⁶⁾と定義されている。「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という3つの力と、それらを構成する12の具体的な能力要素をさす。近年、この評価シートが大学などで学生から社会人へのスムーズな移行を目指すために活用⁷⁾されている。これは、卒業後に専門的な知識やスキルだけではなく、社会人としての基礎的な力のある学生を社会が求めているためと考えられるが、専門学校で活用されている事例は著者らが知る限り見当たらない。学生が社会に出るまでに身につけておきたい基礎的な力には、他に生きる力⁸⁾ 人間力⁹⁾ 社会力¹⁰⁾ などが挙げられる。「生きる力」は、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の3つの力からなる。2002年から文部科学省は、初等・中等教育の学習指導要領において、生きる力を育むことを基盤⁸⁾と定めている。「人間力」は、社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力⁹⁾と定義されている。「社会力」は、人が人となつながら社会を作る力すなわち、よりよい社会を創ろうとする意欲と構想力（よきビジョンを考える力）と実行力（考えたことを実現する力）であり、社会力がある人間の具体的イメージ15項目¹⁰⁾が示されている。

これらの中でも社会人基礎力は、職場で必要とされる力と明記されており、企業での研修や社員教育にも活用されている⁶⁾。加えて、学生自身も知識やスキルの他に主体性や状況把握力など、社会人基礎力を身につけたいという声も

聞く。そこで本研究では、学生が社会に出るまでに身につけておきたい基礎的な力として、社会人基礎力を用いることとした。また、高校新卒の学生（以下、「高校新卒」とそれ以外の学生（以下、「それ以外」）では、社会人基礎力の捉え方（自己認識）に違いがあると考えられる。自己認識とは心理社会的能力の一つであり、日常生活における要求や問題に対して効果的に対処するために必要な個人の能力¹¹⁾である。自己認識は他の心理社会的能力形成の基盤になるもので、自己実現のために大変重要な要素¹²⁾といわれている。

社会人基礎力の評価シートの多くは、①前に踏み出す力②考え抜く力③チームで働く力の3つの力について、それらを構成する12の能力要素の実例から、できる程度を点数等の回答から評価^{13,14)}をしている。しかし、現在自分ができる力を評価するだけではなく、現在不足していると思っている（必要な）力を認識（自己認識）できることも重要ではないかと考える。できる力と必要な力には、ずれが生じていることも考えられ、自己認識スキルを高めるためには、学生自身がそのギャップを知ることが必要ではないかと考える。また教職員は、学生それぞれの入学の目的や学習目標、能力の違いを把握し、社会に求められる栄養士の養成だけでなく、学生が自己の目的達成の可能性を高められる環境（授業）を作ること必要と考える。

そこで本研究は、2年制栄養士専門学校の多様な背景の学生の入学目的や卒業後の希望などの学習目標と、社会人基礎力の違いを明らかにすることを目的とした。学生が学習目標を達成し、自己実現のための支援の方法を、N専門学校を事例に検討する。

Ⅱ. 方法

1) 質問紙の作成

2017年2月、N専門学校1年生14名に入学の目的など学習目標に関するフォーカスグループインタビュー¹⁵⁾を実施し、記録から逐語録を作成した。質的統合法¹⁶⁾を用い、その中から入学のきっかけや、学習目標などの発言を全て抜き

出し、ラベルを作成した。似たラベルをグループにして表札を付け、関連性のあるグループをカテゴリー化した。それらと社会人基礎力（12の要素と発揮できた例）¹⁷⁾を合わせて質問紙を作成した。

2) 調査

2017年4月、作成した質問紙を用い、N専門学校1年生65名全員に自記式質問紙調査を集合法にて実施した。回収後、対象者（有効回答率100%）を「高校新卒」群と「それ以外」群に分けて、入学の目的、卒業後の希望と社会人基礎力の違いを検討した。

3) 解析

入学の目的と卒業後の希望など学習目標は、「あてはまる」と、「ややあてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない」を「あてはまらない」として2つに分け、Fisherの正確確率検定にて比較を行った。このように区分したのは、明確な目標を持つ者を抽出したかったこと、実践とその他の栄養指導の問いでは、指導対象は異なるが同じ質問項目であるため、結果の比較ができるからである。“現在必要な力”は、「必要・やや必要」は「必要」、「あまり必要ではない・必要ではない」は「必要ではない」とし、Fisherの正確確率検定にて比較を行った。“現在できる力”の比較については、Mann-WhitneyのU検定を用いた。信頼性の確認としてCronbachの α 係数を求めた。各要素の α 係数は主体(0.750)、働きかけ力(0.768)、実行力(0.729)、課題発見力(0.503)、計画力(0.781)、創造力(0.735)、発信力(0.618)、傾聴力(0.488)、柔軟性(0.790)、状況把握力(0.797)、規律性(0.783)、ストレスコントロール力(0.721)であった。低い数値を示す要素もあるが、概ね0.7付近を示しているため指標として用いたが、今後は検討の必要がある。

なお、すべての統計解析にはIBM SPSS Statistics 24を用い、有意水準5%（両側検定）とした。

4) 倫理的配慮

本研究は、名古屋学芸大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。[フォーカスグループインタビュー（承認日2017年3月4日、承認番号

180）質問紙調査（承認日2017年4月12日、承認番号183）。

すべての対象者には、研究協力は強制ではないこと、インタビューでの発言、質問紙への回答は成績に関係しないこと、個人情報保護に十分配慮することを説明し、同意が書面で得られた者のみを対象とした。

Ⅲ. 結果

1) 質問紙の作成

フォーカスグループインタビュー協力者の属性を表1に示す。14名中「高校新卒」は7名、「それ以外」は7名であった。「それ以外」は、年齢は20代6名と40代1名、学歴は高校卒2名、短期大学卒1名、大学卒2名、大学中退者2名、就業経験は有る者3名、無い者4名、既婚者は1名（I）である。

逐後録から作成されたラベルは、「高校新卒」から56枚、「それ以外」から66枚だった。合計122枚のラベルは12グループにまとめられた。それらを、学習の目標に関する9グループ、心理社会的な能力に関する1グループ、入学の目的に関する2グループにカテゴリー化した（図1）。

以上の結果と、社会人基礎力（3つの能力12の要素）から、質問紙の枠組み（表2）を作成した。大項目は基本属性、A入学の目的、B卒業後の希望、D入学時の学習目標、C社会人基礎力：現在必要な力、E社会人基礎力：現在できる力とした。基本属性の質問は、性別、最終学歴、職歴の有無、年齢、入学時の資格の有無とした。Aは資格取得に関する質問、Bは将来の仕事に関する質問とした。Dは学習の目標に基づき理論と実践等に関する具体的な質問とした。Cは12の要素を自分が“現在必要な力¹⁸⁾”を問う質問とした。Eは12の要素ごとに力を発揮できた3例の合計36問を、自分が“現在できる力”を問う質問とした。回答方法はA、B、Dはそれぞれ4段階（あてはまる ややあてはまる

あまりあてはまらない あてはまらない）の選択式とした。Cは4段階（必要 やや必要 あまり必要ではない 必要ではない）の選択式とした。Eは看護系大学生の社会人基礎力に関

表1 フォーカスグループインタビュー協力者の属性

		高校新卒						それ以外													
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N						
性別		女	女	女	男	女	女	女	男	女	女	女	男	女	男						
入学時年齢		18	18	18	18	18	18	18	21	43	23	21	25	22	20						
最終 学歴	高校	○	○	○	○	○	○	○	○						○						
	短期 大学									○											
	大学										○			○							
	大学 中退											○	○								
就業 経験	無								○			○	○	○							
	1 年未満																				○
	1 年以上 5 年未満																○				
	5 年以上 10 年未満																○				

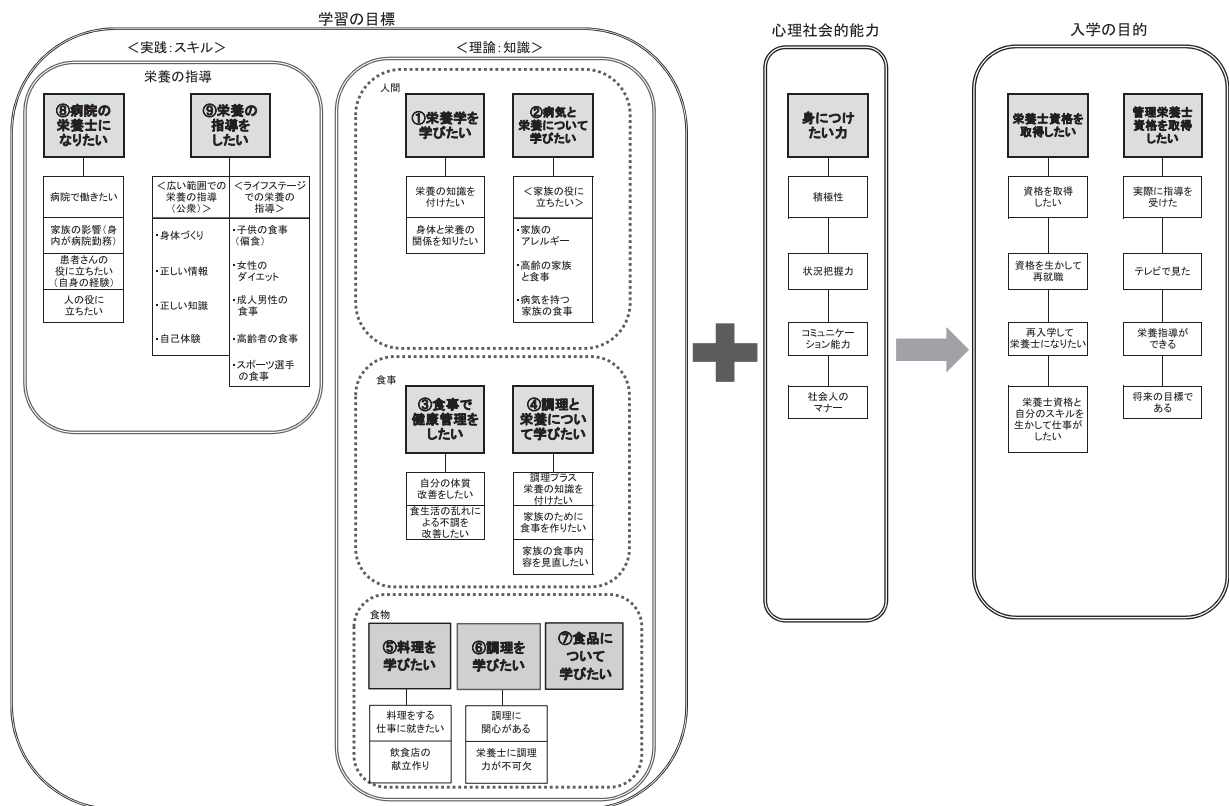


図1 入学の目的と学習の目標の関係

表 2 質問紙の枠組み

順番	大項目	中項目	小項目
	基本属性	性別 最終学歴 職歴 年齢	
A	入学の目的	入学は、何か資格を取得したいから 入学は、「栄養士」の資格を取得したいから 入学は、「管理栄養士資格」を取得したいから	
B	卒業後の希望	栄養士として仕事をしたい 入学前の職歴や取得していた資格を生かした仕事をしたい	
D	入学時の学習目標	理論 栄養学・ 調理・食品 実践 栄養の指導 その他	栄養学を学びたい 身体と栄養の関係を学びたい 病気と栄養の関係を学びたい 調理学を学びたい 調理と栄養の関係を学びたい 調理技術を学びたい 調理技術と栄養の関係を学びたい 食品学を学びたい 食品と栄養の関係を学びたい 食品衛生学(食品安全)を学びたい 食品衛生と栄養の関係を学びたい 専門的分野で、特定な人(家族等)のための栄養の指導ができるようになりたい 専門的分野で、様々な人(不特定多数)のための栄養の指導ができるようになりたい フードサービス会社や飲食店で調理をする仕事ができるようになりたい 書籍、雑誌、テレビなどで食に関する仕事ができるようになりたい
C	社会人基礎力 現在必要な力	主体性(物事に進んで取り組む力) 働きかけ力(他人に働きかけ巻き込む力) 実行力(目的を設定し確実に行動する力) 課題発見力(現状を分析し目的や課題を明らかにする力) 計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力) 創造力(新しい価値を生み出す力) 発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力) 傾聴力(相手の意見を丁寧に聴く力) 柔軟性(意見の違いや立場の違いを理解する力) 状況把握力(自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力) 規律性(社会のルールや人との約束を守る力) ストレスコントロール力(ストレスの発生源に対応する力)	

(表 2 続く)

(表 2 の続き)

順番	大項目	中項目	小項目
E	社会人基礎力 現在できる力	主体性	自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる
			自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる
		働きかけ力	自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
			相手を納得させるために、協力することの必然性(意義、理由、内容など)を伝えることができる
		実行力	状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる
			周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけている
		課題発見力	小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる
			失敗を怖れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる
		計画力	強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
			成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる
		創造力	現状を正しく認識するための情報収集と分析ができる
			課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
		発信力	作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる
			常に計画と進捗状況の違いに留意することができる
		傾聴力	進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる
			複数のもの(もの、考え方、技術等)を組み合わせて、新しいものを作り出すことができる
		柔軟性	従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる
			成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
		状況把握力	事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる
			聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる
		規律性	話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
			内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる
		ストレス コントロール力	相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる
			相手の話を素直に聞くことができる
		状況把握力	自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる
			相手がなぜそのように考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる
		規律性	立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
			周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる
		状況把握力	自分にできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる
			周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうように行動することができる
		規律性	相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している
			相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる
		ストレス コントロール力	規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる
			ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りてでも取り除くことができる
		状況把握力	他人に相談したり、別のことに取組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる
			ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにしている

する調査の方法¹⁹⁾を用いて選択肢を点数化(できる4点 ややできる3点 あまりできない2点 できない1点)した。

基本属性、A～Eの順番に並び換えて仮質問紙を作成し、職員と学生によるプレテストを経て、質問紙を完成させた。

2) 調査協力者

質問紙調査に協力した1年生65名の基本属性を表3に示す。65名中「高校新卒」群46名(71%)、「それ以外」群19名(29%)であった。

性別は女性49名(75%)、男性16名(25%)で、最終学歴は高校新卒46名(71%)、高校既卒(社

会人)8名(12%)、大学卒6名(9%)、大学中退3名(4.6%)、その他(専門学校卒等)2名(3%)、就業経験は有りが15名(23%)、無しが50名(77%)、年齢は18歳46名(71%)、19～29歳11名(17%)、30代3名(5%)、40代4名(6%)、50代1名(2%)だった。

3) 入学の目的と卒業後の希望

結果を表4に示す。「高校新卒」群と「それ以外」群に有意差はなかった。「栄養士」の資格を取得したいからが、「高校新卒」群は45名(98%)、「それ以外」群は19名(100%)であったのに対し、「管理栄養士」の資格を取得したい

表3 N専門学校1年生の基本属性

		全体 n=65 人 (%)	高校新卒 n=46 人 (%)	それ以外 n=19 人 (%)	p 値 ^{#1}
性別	男性	16 (24.6)	9 (19.6)	7 (36.8)	0.205
	女性	49 (75.4)	37 (80.4)	12 (63.2)	
最終学歴	高校	54 (83.1)	46 (100.0)	8 (42.1)	—
	大学	6 (9.2)	—	6 (31.6)	
	大学中退	3 (4.6)	—	3 (15.8)	
	その他	2 (3.1)	—	2 (10.5)	
就業経験	無	50 (76.9)	46 (100.0)	4 (21.0)	—
	0～5年未満	5 (7.7)	—	5 (26.3)	
	5年以上10年未満	2 (3.0)	—	2 (10.5)	
	10年以上19年未満	4 (6.2)	—	4 (21.1)	
	20年以上	4 (6.2)	—	4 (21.1)	
年齢	18歳	46 (70.8)	46 (100.0)	—	—
	19～29歳	11 (16.9)	—	11 (57.9)	
	30～39歳	3 (4.6)	—	3 (15.8)	
	40～49歳	4 (6.2)	—	4 (21.0)	
	50歳以上	1 (1.5)	—	1 (5.3)	

#1: Fisher の正確確率検定

表4 入学の目的と卒業後の希望

	高校新卒 n=46 人（%）	それ以外 n=19 人（%）	p 値 ^{#1}
入学は何か資格を取得したいから			
あてはまる	36（78.3）	14（77.8）	1.000
あてはまらない ^{#2}	10（21.7）	4（22.2）	
入学は「栄養士」の資格を取得したいから			
あてはまる	45（97.8）	19（100）	1.000
あてはまらない ^{#2}	1（2.2）	0	
入学は「管理栄養士資格」を取得したいから			
あてはまる	26（56.5）	11（61.1）	0.785
あてはまらない ^{#2}	20（43.5）	7（38.9）	
卒業後は栄養士として仕事をしたい			
あてはまる	39（84.8）	14（73.7）	0.311
あてはまらない ^{#2}	7（15.2）	5（26.3）	
卒業後は入学前の職歴や取得していた資格を生かした仕事をしたい			
あてはまる	8（17.4）	2（13.3）	1.000
あてはまらない ^{#2}	38（82.6）	13（66.7）	

欠損値は項目ごとに除く

#1: Fisher の正確確率検定

#2: ややあてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない

からは、「高校新卒」群は26名（57%）、「それ以外」群は11名（61%）だった。

卒業後の希望の結果は、両群に有意差はなかったが、高校新卒群は「栄養士として仕事をしたい」の回答が39名（85%）と高かった。

4）社会人基礎力

結果を表5、6に示す。“現在必要な力”は、「高校新卒」群と「それ以外」群に有意差はなかった。主体性、実行力、発信力の3つは、必要と回答した者の割合が「高校新卒」群は45名（98%）、「それ以外」群は18名（95%）と共に高い割合であった。

“現在できる力”は、それ以外群は高校新卒群と比べて主体性、計画力、創造力は有意に点数が高かった。高校新卒群はそれ以外群と比べて傾聴力は有意に点数が高かった。

IV. 考察

入学の目的と卒業後の希望において、「高校新卒」群より「それ以外」群は、栄養士資格の取得という明確な目的や広い分野の学習目標を持っていると考えていたが、新卒、既卒を問わず、入学は栄養士資格取得を目的としていた。また、管理栄養士資格の取得を目的とする割合は予想より高くなかった。短期大学、専門学校における管理栄養士・栄養士の入学志望動機の調査では、将来管理栄養士の資格を取りたいという回答は専門学校70%、短期大学38%と報告²⁰⁾している。学生のインタビューからも、「それ以外」の強い学習意欲や、スキルアップ、新しい道を進むための将来の目標となっていることが伺えた。インタビューした学生は約1年間の学校生活の中で、学習への関心が深まり、また現役の管理栄養士として働く教員の話から、あこがれや就職への希望を持つことが考えられる。しかし、一般的に専門学校生が、管理栄養士資格試験を受験するには、所定の実務経験（2年制の専門学校では3年）が必要となる。年齢が30代以上の者には、壁となっていると考えられる。また、「高校新卒」も管理栄養士資格の取得は具体化できていないことが予想され、両群がこのような結果であったと考える。

卒業後の希望として“栄養士として仕事がしたい”者の割合が、「高校新卒」群は予想より高かった。本論文では結果として示していないが、入学時の学習目標（理論 栄養学・調理・食品）11項目（表2参照）中10項目では、有意差は見られなかった。両群共に80%以上が学習目標としていたのは、“栄養学を学びたい”“身体と栄養の関係を学びたい”“調理と栄養の関係を学びたい”だった。一方65%未満と少なかったのは、“食品衛生学（食品安全）を学びたい”“食品衛生と栄養の関係を学びたい”だった。しかし、“調理技術を学びたい”のみ「高校新卒」群は43名（94%）、「それ以外」群は14名（74%）で、有意差（ $p=0.041$ ）が見られ、「高校新卒」は、栄養士は調理をする仕事であるとのイメージを持っていると考えられる。しかし、入学時の学習目標（その他）の“フードサービス会社や飲食店で調理をする仕事ができるようになりたい”を学習目標とする者は、「高校新卒」群17名（37%）、「それ以外」9名（47%）と半分にも満たなかった。「高校新卒」は、入学時に調理経験等が少なく、栄養士として調理技術は身につけたいが、調理を主とする分野が具体的な就職にまだ結びつかないと考える。しかし、進路選択に対する自己効力感の強い者は、進路選択行動を活発に行い努力もするため、その行動は効果的なものになるとされる²¹⁾。自己効力感を高めるためには1) 個人の成功経験、2) 社会的モデリング、3) 社会的説得力、4) 行動に対する情緒や身体反応の修正²²⁾といわれている。よって「高校新卒」へは、2年間の中で、調理技術の基礎や、和洋食その他豊富な料理を学ぶ実習、実践経験ができるフードサービス実習等を通して、技術と仲間との関係を学ぶことにより、自己効力感が高まり進路選択の目標も広がると考える。

インタビューでは、これまでの自分の食生活に関すること、食事指導を受けた内容、身近な人の病気等の実経験を聞くことができた。「それ以外」は、自身の経験も多く、病気や健康問題について「高校新卒」より具体的になっていると考えられ、教員もそれに対応できるよう準備が必要である。また、「高校新卒」も広く学習

表5 現在必要な力

	高校新卒 n=46 人 (%)	それ以外 n=19 人 (%)	p 値 ^{#1}
主体性			
必要	45 (97.8)	18 (94.7)	0.502
必要ではない	1 (2.2)	1 (5.3)	
働きかけ力			
必要	43 (93.5)	17 (89.5)	0.625
必要ではない	3 (6.5)	2 (10.5)	
実行力			
必要	45 (97.8)	18 (94.7)	0.502
必要ではない	1 (2.2)	1 (5.3)	
課題発見力			
必要	40 (87.0)	18 (94.7)	0.663
必要ではない	6 (13.0)	1 (5.3)	
計画力			
必要	42 (91.3)	17 (89.5)	1.000
必要ではない	4 (8.7)	2 (10.5)	
創造力			
必要	42 (91.3)	17 (89.5)	1.000
必要ではない	4 (8.7)	2 (10.5)	
発信力			
必要	45 (97.8)	18 (94.7)	0.502
必要ではない	1 (2.2)	1 (5.3)	
傾聴力			
必要	41 (91.1)	18 (94.7)	1.000
必要ではない	4 (8.9)	1 (5.3)	
柔軟性			
必要	38 (82.6)	17 (89.5)	0.710
必要ではない	8 (17.4)	2 (10.5)	
状況把握力			
必要	42 (91.3)	16 (84.2)	0.408
必要ではない	4 (8.7)	3 (15.8)	
規律性			
必要	41 (89.1)	17 (89.5)	1.000
必要ではない	5 (10.9)	2 (10.5)	
ストレスコントロール力			
必要	43 (93.5)	17 (89.5)	0.625
必要ではない	3 (6.5)	2 (10.5)	

欠損値は項目ごとに除く

#1: Fisher の正確確率検定

表6 現在できる力

	高校新卒 n=46		それ以外 n=19		p 値 ^{#1}	α 係数 ^{#2}
	中央値	(25%, 75%)	中央値	(25%, 75%)		
主体性	8.0	(7.0, 9.0)	9.0	(8.0, 11.0)	0.003*	0.750
働きかけ力	8.0	(6.0, 9.0)	7.0	(6.0, 9.0)	0.819	0.768
実行力	9.0	(8.0, 10.0)	9.0	(8.0, 11.0)	0.125	0.729
課題発見力	8.0	(7.0, 9.0)	9.0	(8.0, 9.0)	0.260	0.503
計画力	8.0	(6.0, 9.0)	9.0	(8.0, 10.0)	0.033*	0.781
創造力	7.0	(6.0, 8.0)	9.0	(7.0, 9.0)	0.047*	0.735
発信力	8.0	(7.0, 9.0)	7.0	(6.0, 8.0)	0.067	0.618
傾聴力	10.0	(9.0, 11.0)	9.0	(7.8, 10.0)	0.027*	0.488
柔軟性	10.0	(9.0, 11.0)	9.0	(8.8, 11.0)	0.085	0.790
情況把握力	9.0	(8.0, 10.0)	9.0	(9.0, 10.0)	0.471	0.797
規律性	11.0	(10.0, 12.0)	11.0	(9.8, 12.0)	0.956	0.783
ストレスコントロール力	9.5	(7.0, 10.3)	9.0	(8.0, 10.3)	0.868	0.721

#1 : Mann-Whitney のU検定 * $p < 0.05$ #2 : Cronbach の α 係数

への関心を持っていることを心に留め、興味を持てるような授業内容を検討すべきと考える。

社会人基礎力についての質問では、自分に“現在必要な力”は「高校新卒」群と「それ以外」群は12の要素のうち特に主体性、実行力、発信力であると同じ程度に回答した。「それ以外」群は経験や他人との関わりの中で、必要な力を認識できているのではないかと考える。「高校新卒」群は、自分が現在できる力と現在必要な力の認識（自己認識）にずれが生じていることが考えられた。自己認識スキルを高めるためには、自己を客観視し、評価することが必要²³⁾である。そのことにより、必要な力を認識できるだけではなく、自分が気づかなかつた能力を知ることとされる。「それ以外」群は、傾聴力の点数が低かった。実習の授業時、経験や知識から、時に自ら作業を進めてしまう場面が思い浮かぶが、自分に現在必要な力として認識している²⁴⁾と考えられ、班作業を行う際に参考にすべきと考える。

「高校新卒」と「それ以外」は、多様な背景、異なる経歴、異なる年齢層の者と共に学ぶことが必要とされる。特に実習授業において「高校新卒」と「それ以外」が共に作業を行う良い面、困難な場面がある。それは卒業後、社会に

出ても続いていくことである。現代社会はコミュニケーションツールが多様化した影響で、人との関わりが希薄化し、若者は複雑な人間関係に対応する能力を高められずに社会人になっている²⁵⁾といわれる。就業前の学校生活の中で、様々な人を認めていくことが自分を知ることにつながるかもしれない。多様な学生がお互いを少しでも知る機会を作る方法として、授業では、班ごとに話し合って作業計画を立てる、作業分担を明確にするなどが必要と考える。

N専門学校の多様な学生は、予想より違いがない部分と、想定外に違う部分もあった。これらを認識し、学生がお互いを認められるよう学びの場を作るべきと考える。そのような環境は学生が自分の自己実現の可能性を高められる²⁶⁾と考える。学生が様々な人を認められることは、心理社会的能力をつけることにつながり、社会に求められる栄養士になりうると考える。

本研究のような質問紙調査は「単純測定効果」が期待できる。これは、人は何をしようとしているのか質問されると、答えに沿った行動をとる可能性が高くなること²⁷⁾をいう。今後、本研究協力者の学習意欲など観察していく必要があるが、入学時に目的や卒業後の希望、自分に必要な力などの質問に回答することで、改めて入

学の目的や、自分自身について、確認できる機会となりうると考えられる。

本研究の限界として、以下のことがあげられる。N専門学校の平成29年度の入学者は、女性75%、男性25%、年齢30、40代10%、就業経験10年以上は12%であった。入学者の属性は毎年大きくも小さくも変わる。高校新卒以外の占める割合も異なり、学生の背景によって結果も異なると思われる。しかし、これは“2年制栄養士専門学校の様々な学生”を事例として取り上げた研究である。よって、本研究の学生の入学の目的、卒業後の希望、社会人基礎力の認識等、示された結果は、一例として今後の資料となりうると考える。他の栄養専門学校や短期大学など、同じ方法での研究成果が待たれる。

V. 結論

社会人基礎力について、“現在必要な力”は、「高校新卒」群と「それ以外」群に有意差は見られなかった。“現在できる力”は、主体性、計画力、創造力について、「それ以外」群は「高校新卒」群と比べて有意に点数が高かった。傾聴力については、「高校新卒」群は「それ以外」群と比べて有意に点数が高かった。

教育者はこれらを認識し、学びの場を作ることが、多様な学生の自己実現の可能性を高めることにつながると考えられた。

VI. 謝辞

調査にご協力とご理解をいただきました、N専門学校の校長先生と職員の皆様ならびに専門学校生に心より感謝申し上げます。

VII. 利益相反

本研究において利益相反に相当する事項はない。

文献

1) 一般社団法人全国栄養士養成施設協会. 栄養士に

なるには. (<https://www.eiyo.or.jp/> accessed 2020-10-27)

- 2) 名古屋栄養専門学校. 入試・入学について. (<http://www.nsc.ac.jp/nutrition/social.html> accessed 2020-10-27)
- 3) 学校法人食糧学院. 学科紹介. (<http://www.dietitian.ac.jp/Department> accessed 2020-10-27)
- 4) 名古屋文理栄養士専門学校. 学科紹介. (<http://spe.nagoya-bunri.ac.jp/course/about.html> accessed 2020-10-27)
- 5) 武蔵野栄養専門学校. 学科紹介. (<http://sphttp://www.musashino-eiyou.ac.jp/campus.html> accessed 2020-10-27)
- 6) 経済産業省社会人基礎力. 社会人基礎力. (<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/www.meti.go.jp> accessed 2020-10-21)
- 7) 経済産業省. 社会人基礎力育成グランプリ. (<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/gp.html> accessed 2020-10-21)
- 8) 文部科学省. 学習指導要領「生きる力」. (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/ accessed 2020-10-25)
- 9) 文部科学省. 人間力戦略研究会報告書. (<https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf> accessed 2020-10-25)
- 10) 門脇厚司. 社会力と能機能との関連性に関する理論的実証的考察. 筑波学院大学紀要2007; 2: 25-35
- 11) WHO. PROGRAMME ON MENTALHEALTH LIFE SKILLS EDUCATION IN SCHOOLS WHO/MNH/PSF/93.7A. Rev.2 1-7
- 12) 皆川興栄. 総合的学習でするライフスキルトレーニング. 東京: 明治図書, 2000: 18-48
- 13) インターンシップ・社会人基礎力自己点検シート. (https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/07_Syakaijin_Kisoryoku_Jikotenken.docx accessed 2020-10-23)
- 14) 大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子. 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 日看管会誌2017; 21: 87-97
- 15) S・ヴォーン, J・S・シューム, J・シナグブ. グループ・インタビューの技法. 東京: 慶應義塾大学出版会, 2009: 11
- 16) 山浦晴男. 質的統合法入門考え方と手順. 東京: 医学書院, 2012: 23-56
- 17) 経済産業省 人生100年時代の社会人基礎力について.

-
- (https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf accessed 2020-10-27)
- 18) 今日から始める社会人基礎力の育成と評価.
(<https://www.kokuyo-st.co.jp/stationery/shukatsustyle/img/item01/2008kyoukara.pdf> accessed 2020-10-21)
- 19) 北島洋子, 細田泰子, 星和美. 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討. 大阪府立大学看護学部紀要2011; 17(1): 13-23
- 20) 安友裕子, 山中克己, 平田芳浩, 他. 管理栄養士・栄養士を目指す学生の入学時における学科志望動機. Nagoya Journal of Nutritional Sciences 2016; 2: 41-49
- 21) 田島祐奈, 岩瀧大樹, 山崎洋史. 女子大学生における進路選択に対する自己効力および社会人基礎力の研究. 学苑・人間社会学部紀要 2016; 904: 10-20
- 22) Isobel R. Contento. Nutrition Education. Linking Research. Theory, and Practice. Jones and Bartlett, America: 3rd edition 2019: 139-143
- 23) 青木和佳子, 米谷雄介, 永岡慶三. 社会人基礎力育成を目標としたゼミ活動形態授業の開発と評価. 電子情報通信学会. 2015: 19-22
- 24) Rianne A.M. Bouwmeester, Renske A.M. de Kleijn and Harold V.M. van Rijen. Peer-instructed seminar attendance is associated with improved preparation, deeper learning and higher exam scores: a survey study, Bouwmeester et al. BMC Medical Education 2016
- 25) 吉岡由喜子. 現代の医療現場を生き抜くために, 看護師に求められる人間力の検討—「生きる力」・社会人基礎力・「キー・コンピテンシー」の比較考察を通して—. 太成学院大学紀要 2014; 16: 157-165
- 26) 島井哲志. 幸福の構造. 東京: 有斐閣, 2015: 116
- 27) リチャード・セイラー, キャス・サンスティーン, 遠藤真美訳. 実践 行動経済学—健康、富、幸福への聡明な選択. 東京: 日経 BP 社, 2009: 116

Abstract

Basic social skills of recent high school graduates and older students at a two-year nutrition vocational school: A case study

Naoko Katou¹⁾ and Namiko Adachi¹⁾

Objective: Two-year nutrition vocational schools are characterized by having students of various ages and backgrounds. This study aimed to clarify differences in basic social skills between recent high school graduates and older students.

Methods: A questionnaire was developed based on the results of a focus group interview with 14 first-year students at Vocational School N conducted in February 2017 as well as 12 items from a basic social skills questionnaire recommended by the Ministry of Economy, Trade and Industry. The questionnaire survey was conducted with 65 first-year students at the same school in April 2017. The results were analyzed to investigate differences in basic social skills between recent high school graduates and older students.

Results: There were 46 recent high school graduates and 19 older students. For basic social skills, no significant difference was noted in “what you require at present” between the two groups. However, for “what you can do at present,” the scores on questions about subjectivity, planning ability, and creativity were significantly higher for older students than for recent high school graduates. Scores on the ability to listen attentively were significantly higher for recent high school graduates than for older students.

Conclusion: Efforts based on the results described above at educational facilities would lead to improved self-realization among a diverse student body.

Key Words: two-year nutrition vocational school, basic social skills, learning goals

1) Graduate School of Nutritional Sciences, Nagoya University of Arts and Sciences